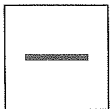


二〇一六年度・学力検査問題【国語】
(中学第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
 - 二、答えはすべて解答用紙にはっきりと記入しなさい。
 - 三、解答用紙のみ試験終了後あつめます。
 - 四、問題は10ページで□・□・□の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
 - 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
- また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。



1、5の——線の漢字と同じ漢字をふくむものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 倉庫にホカンする。

ア この件には一切カンヨしない。
イ ホテルのベツカンに泊まる。
ウ カンチヨウに勤める。
エ スイドウカンが破裂した。

2 欲望をジユウソクする。

ア 公園でキユウソクする。
イ 会がホツソクする。
ウ ヘンソク的なフォーム。
エ ソクドをゆるめる。

3 需要とキヨウキユウ。

エ 真理をツイキユウする。
ア ゼッコウの行楽日和だ。
イ 人気がセンコウする。
ウ テッコウ石を輸入する。

4 大きなケイコウがある。

エ 歌手から俳優にテンコウする。
ア 権力をホジする。
イ 新聞キジを読む。
ウ カクジ帰宅する。

5 昼食をジサンする。

エ 健康ユウリヨウジ。
ウ カクジ帰宅する。
イ 新聞キジを読む。
ア 権力をホジする。

本文は、可愛がって飼っていたブルドッグ「ボス」が死んで、後に残された家族の様子である。

死んだ飼犬を、家の庭へは埋めてやらずに、獣医が紹介してくれた家畜霊園で骨にして貰って八ヶ岳の山麓まで運んだのは、せめて骨だけでも涼しいところに眠らせてやりたいという妻の案にみんなが賛成したからであった。骨は、妻が学校帰りの長女と途中で待ち合わせて、一緒に郊外の霊園まで行って受け取ってきた。白い紙の帽子をかぶせた木箱に、素焼きの小振りの骨壺が納めてあつて、蓋を開けてみると、人の骨だといわれればそうかと思うほかないような白い骨片が、口のところまでぎつしりと詰まっていた。

梅雨入り前のある土曜日の午後、彼は、長女と次女と三人でそれを埋めに山麓へ出かけた。木箱ごと風呂敷に包み、ブティックの名入りの紙袋に入れて、電車の網棚にのせたり三人でかわるがわる手に提げたりしながら運んでいって、小屋の裏手の北側の、いくつかの窓からよく見える林の縁の笹藪に埋めた。墓標はいずれ用意するとして、取り敢えず目印の棒きれを立て、食パンの上に一片のチーズをのせて手向けた。

魔除け代わりに、白木の額に入れてきたボスの写真は、ストープを据えてある部屋の板壁に掛けた。それは、ボスがまだ若くて威厳に満ちていたころ、ある愛犬雑誌のカメラマンが及び腰で撮ってくれたも

彼は、年甲斐もなく高まってきた胸のときめきを抑えながら、わざとどのろろ立っていつて、北側の窓の雨戸を手繰ってみた。ボスの墓はそこからも見えるが、なるほどさつき手向けたところにパンはなかった。わずか二時間足らずの間の出来事であった。

結局、そのときは何者の仕業かわからずに引き揚げることになったが、それ以来、彼は時々、「ボスがパンを食べたわ。」という次女の言葉と、それを聞いたときの自分の胸のときめきを思い出すようになった。ついでに、食パンが一枚、横にして楽々が入ってしまうボスの大きく裂けた口を思い出し、ボスが自分の墓の前の地面から鼻で食パンをゆっくりめくり上げるさまを、いつか見た光景のようにくつきり想像したりした。

彼は、山麓の小屋へ出かけるたびに、途中で買っていた食パンを一枚ずつボスの墓へ手向けた。すると、そのパンはきまつて一時間か二時間のうちになくなった。彼には、次女の冗談半分に共鳴して、ボスが食ったのだと思って見て見ぬふりをしていたという気持が募っていたが、おなじことが度重なると気掛かりでもあった。

その年の秋に滞在したとき、彼はふとした拍子に気紛れを起こして、部屋の北窓から辛抱強く二時間近くも監視をつづけ、供物泥棒が野鼠の仕業だということを突き止めた。ゴルフボールほどの大きさの、青味がかった灰色の毛がふつくとした野鼠である。それがたった一匹で、せっせとパン切れを引きずっては灌木の繁みのなかへ運び込んでいる。

翌朝は、食べ残しのすこし固くなりかけたのを一枚手向けて、どうするかと見ていると、野鼠は懸命にまわりを齧って半分ぐらいの大きさにすると、あとは、さっと背中についたで繁みのなかへ駆け込んでしまった。どんなふうにして担いだのかはわからないが、不意に野

の一枚で、耳がちいさく、垂れ目で、獅子鼻で、頬には深い皺が何本となく刻まれていて、広く裂けた口の真ん中から舌の先を波形に覗かせているボスの顔が、八つ切りの印画紙いっぱいに写っていた。

翌朝、三人は、朝食前にちよつと騒いだ。次女が、ボスの墓にいちばん近い風呂場の窓からふと覗いて、昨日手向けたはずの食パンがなくなっているのに気づいたからである。三人は急いでボスの墓までいった。すると、チーズだけは残っていたが、やはり食パンはどこにも見当らなかった。

このあたりを暮らしの縄張りになっている獣の仕業だと思ふほかはなかった。この一帯には、人に危害を加えるような獣はいないが、狐や狸をはじめ小動物がたくさんいる。そのうちのどれかが、昨夜のうちに、こっそり巢へ運んでいったのに違ひなかった。

「でも、チーズが残ってるのはどういうわけ？」

長女がそういうので、
「あれは臭いからな。食い馴れないやつには鼻が曲がるような匂いだ。」

と彼はいった。
三人は、今日の分として新しく食パンを一枚手向け直してから、おなじ食パンで朝食をした。

それから小一時間ほどして、彼が自分の仕事部屋の揺り椅子にいと、娘たちが頓狂な声を上げながら駆け込んだ。何事かと思うと、
「お父さん、ボスがパンを食べたわ。」

次女が目を見てそういった。
「さつき上げたパンが、もうないの。嘘だと思ったら見てごらんない。」
と長女もいった。

鼠の姿が見えなくなったかと思うと、パンだけがするすると繁みの方へ走ったのである。あつという間の早業であつた。

これで気掛かりはなくなったが、なにか味気ない気がしないでもなかった。

おとしは冷夏で、山麓へはいちど出かけて三日泊つてきただけであつた。その代わり、去年はいつもの年より早く、新緑のころに妻と小屋を開けに出かけたが、そのとき妻が小屋のなかでおかしなものを見つけた。

着いてまもなく、雨戸という雨戸を開け放つてから、ベランダの椅子でぼんやり小鳥の声を聞いていると、

「ちよつときてごらんさい。なんだか変なの。」

なかからそういう妻の声がかこえた。

妻は濡れ布巾を手にしたまま、食卓のそばの板壁に掛けてあるボスの写真をまじまじと見ていた。

「その写真がどうかしたのか。」

「なんだか変なものが見えるけど。あなたにはどう？」

彼は、妻と並んで写真を見詰めているうちに、ボスの裂けた口の両端から、白っぽい筋が一本ずつ垂直に垂れ下っているのに気がついて、おやと思つた。

「これはなんだ。」

と指さしたついでに、指先でそのガラスをこすつてみたが、それは埃でも汚れでもなかった。

「変でしょう。どうしたのかしら。」

「わからない。外して調べてみよう。」

彼は、白木の額をベランダへ持ち出して、なかの写真を抜き出してみた。白い筋は、ガラスの内側の汚れでもなくて、写真そのものに付

出してみても、涎なんぞの跡形もなかった。夫婦は顔を見合わせた。

「……そうすると」と妻はいった。「あの白い筋はいつたいなんだつたの？」

「いろいろ調べてみれば理由のあることだろうけど、俺たちにはボスの涎でいいじゃないか。」

と彼はいった。

歯ブラシをくわえて風呂場へ入ると、窓から、ボスの墓が澄んだ日ざしを浴びて明るんでいるのが見えた。いつものことながら昨日のパンは影も形もなくなっている。彼は、歯ブラシを口から抜き取ると、

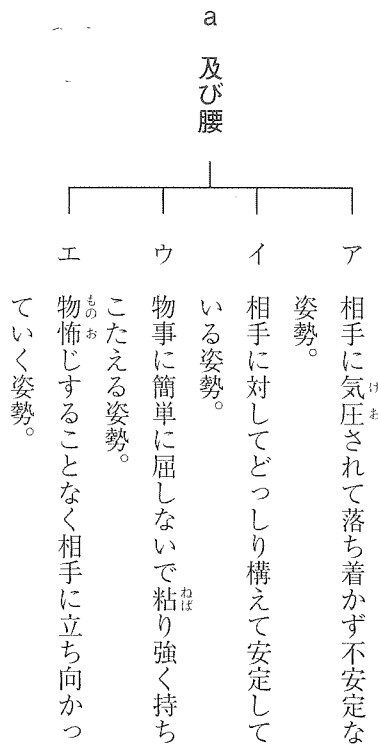
「ボスが食つた。」

と呟いて、また歯ブラシを口に戻した。

(三浦哲郎「夜話」『三浦哲郎自選全集』新潮社より)

※1 プティック：高級洋服店。

問一 線a「及び腰」・b「頓狂な」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



着していた。いや、指の腹でこすつてみても異物の感触が全くなく、いっこうに落ちそうな気配もなかったから、そこになにかが付着しているのではなかった。それは、まるで目や耳や鼻と一緒に写つた写真の一部であるかに見えた。

「うちのアルバムに貼つてたころは、こんな筋なんかなかったでしょう。」

「去年はほとんど閉め切つてたから、寒さか湿気のせいで出来たのかしら。」

「それにしても、口の両脇だけというのは、どういうことだ。」

彼は、写真を元通り額におさめて、もういちど眺めた。

「なんだかボスが涎を流しているように見えない？」

妻が笑つてそういつた。そういえば、したたり落ちる涎のように見えなくもない。

「最初それに気がついたとき、あ、ボスが涎を流してる、そう思ったの。そしたら、ボスが食物をねだるときの声が耳にきこえるような気がしたわ。」

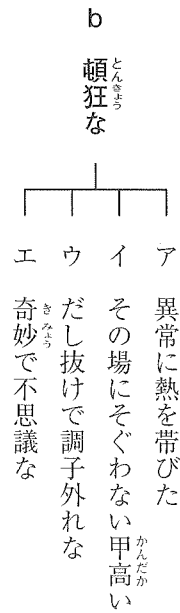
「ボスが催促しているわけか。」

彼は額を板壁に戻すと、妻と一緒にボスの墓へ食パンを手向けにいつた。

翌朝、彼は妻に揺り起こされた。

「ボスの写真を見て。涎が消えてなくなつてゐるわ。」

妻は目を睜るようになってそういつた。まさかと思つたが、起きていつてみると、妻のいう通りであつた。昨日は確かに口の両端から垂れていた涎が、きれいにぬぐい取つたように消えている。額をベランダへ



問二 本文を内容から二つに分けるとしたら、後半はどこからですか。その最初の五字を抜き出さない。

問三 線1「おなじ食パンで朝食をした」とありますが、それはどのようなことを表現していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家族と同等の存在であつた「ボス」の死に打ちひしがれて、朝食を作つたり食べたりする気力も無くしていること。
- イ 不幸にも死んでしまった「ボス」とはかわりなく、その後に残された家族が日常を淡々と変わらず過ごしていること。
- ウ 家族と同じパンを「ボス」に供えるという供養の思いと共に「ボス」が死んでも家族の一員としてその心の中に生き続けていること。
- エ 「ボス」の生前と同様にふるまうことで、「ボス」が死んだことのさびしさをかみしめつつも家族が落ち着きを取り戻そうとしていること。

問四 ——線2「わざとの」に「ていつて」とありますが、なぜ「わざと」のですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘たちのただならぬ様子や会話から、ほかの動物がいたずらしたのではなく、「ボス」が本当に生きているのではないかと「彼」も思うようになり、その驚きをかくすため。

イ 娘たちの会話の通りに死んだはずの「ボス」がよみがえるはずもなく、「彼」は子どもっぽい娘たちをどうしかるべきか思案しているため。

ウ 立派に成長した娘たちが子どもじみた作り話を盛り上げようと工夫していることに気付き、「彼」も同調してやろうと思ったため。

エ 娘の発言は冗談半分のものであると「彼」自身わかっており、日常を越えたおもしろみを感じつつも、表情や態度に表さないため。

問五 ——線3「食パンが」たりした」とありますが、それと同様に家族が生前の「ボス」を「思い出し」ている三十五字以内の一文を探し、最初の五字を抜き出さない。

問六 ——線4「なにか味」なかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ボス」が食パンを食べに来ているという空想を楽しむことができなくなってしまったから。

問八 ——線6「彼は、歯」に戻した」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 手向けた食パンをどんな動物が食べているのか不安だったが、犯人は「ボス」だと分かって安心すると共に娘たちにとどのように説明しようか楽しみにしている。

イ つまらぬことをうったえかけてくる妻が面倒なので、とりあえず同調して適当な理屈をつけて納得させてきたものの、あまりにも強引な言い方だったと反省した。

ウ 朝の日差しを浴びる、食パンが無くなった「ボス」の墓を見て、「ボス」と自分たち家族とをつなぐ不思議を自身の中でうれしく思いつつ、遠慮がちに肯定している。

エ 娘たちが「ボス」が食パンを食べたと喜んでいたように、朝日に輝く「ボス」の墓に供えたパンを探す自分もまたそれを楽しんでいたことに気付いた。

問九 本文の表現についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ボス」を愛する家族それぞれの視点に寄りそって、会話を多用しつつ、次々と展開する不思議な事件を小気味よく解決している様子が描かれている。

イ 登場人物の心の中も見通す視点から物語られ、それぞれの思いが異なる登場人物の心のすれ違いが悲劇的に描写されている。

イ 今回の出来事が原因の全てだとは思いつれず、まだ心のどこかで「ボス」が食パンを食べたと信じているから。

ウ 食パンがなくなった原因を知らせることで娘たちががっかりするであろうことを想像しているから。

エ 食パンが無くなった様々な原因を考えめぐらせる楽しさがこれで失われてしまったから。

問七 ——線5「妻と一緒」に「いった」とありますが、この行動から読み取れる「彼」の心情として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長い間山小屋に來なかつたため、久しぶりに家族の一員である「ボス」の墓参りをしようと考えている。

イ 「ボス」の供養は面倒ではあるが、妻の申し出をないがしろにするとさらに困ったことになるかと心配している。

ウ 家族の一員としての「ボス」にみんなと同じパンを供えてやりたいと思っている。

エ 妻の「ボスの催促」という話を聞いたことで「ボス」に対する楽しい想像を再び継続できると考えている。

ウ 飼犬の死から不思議な運命に振り回される「彼」の視点を通して、家族の絆によって厳しい現実を乗り越えていく姿を、短い会話のやり取りを通して浮かび上がらせている。

エ 家族の「ボス」に対する思い入れが「彼」に寄りそった視点によって、回想や想像をおり交ぜながらユーモラスに語られている。

次の文章は、江戸時代の俳人松尾芭蕉が弟子の曾良との旅を描いた『おくのほそ道』の中の俳句「閑さや岩にしみ入蟬の声」と、それ以前に作った「古池や蛙飛こむ水のおと」の二つの句に関する文章です。読んで後の問いに答えなさい。なお、文中に出てくる「切字」とは、「や」「かな」といった言葉で俳句をいったん切つて読者に状況を想像してもらい、余韻を生み出す技法です。また、冒頭の古文については、出題者による現代語訳を付記してあります。

日いまだ暮す。禁の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松栢年旧、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり、岩を這て、仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行のみおほゆ。

閑さや岩にしみ入蟬の声

（出題者による現代語訳：日はまだ暮れていない。麓の寺の宿舎を借りておいて、山上の本堂に登る。岩の上に岩が重なり山をなしており、松や檜も老木で、土や石も苔が滑らかに覆っている。岩の上の十二院はいずれも扉を閉じていて、物音一つ聞こえない。崖のふちをめぐり、岩の上をはいあがって、仏殿に参拝したが、すばらしい風景がひっそりと静まり返っていて、心も澄みわたるように思われる。）

そこで、『松尾芭蕉集②』の訳を改めて見直すと、この訳は二つの

切れを見落としていることがわかる。一つはすでに指摘した切字「や」のもたらず切れであり、もう一つは句と地の文の間にある切れである。

この訳はたしかに『おくのほそ道』の地の文には忠実なのだろうが、芭蕉の句には忠実ではないといわざるをえない。

「閑さや」の句は今まで蟬は一匹か複数か、はたまたアブラゼミかミンゼミかなど主に「蟬の声」をめぐって論議されてきたが、これでは肝心の句の構造という土台をおろそかにしたまま X をあげつらってきたことになるだろう。

「閑さや」の句は「閑さの中で岩にしみ入るように蟬が鳴いている」というのではなく、「岩にしみ入るように鳴く蟬の声を聞いて天地の閑かさに気がついた」といっているのではないか。

芭蕉は夏の日の午後、炎天にそびえる岩山に登って山上でしばし休んだ。あたりでは蟬が岩にしみ入るような声で鳴いている。耳を澄ますと、蟬の声の彼方に夏の天地の大いなる静寂が広がっていた。それは芭蕉のいる岩山をとり巻く宇宙の静寂そのものだった。この大いなる天地の静寂こそがこの句の「閑さ」だろう。

『松尾芭蕉集②』は、芭蕉は「閑さ」の中で「岩にしみ入蟬の声」を聞いたと考えた。しかし、そうではない。芭蕉はこのとき、「岩にしみ入蟬の声」をきっかけにして急に開けた「閑さ」に驚いたのである。一つの音によって別の音の不在に気がつく。芭蕉は岩山の上で「岩にしみ入蟬の声」を聞いて天地に広がる「閑さ」に気がついた。その驚きこそがこの句の「閑さや」だった。

俳句ではものが起こった順番どおりに言葉が並んでいないことがよくある。まず驚いたことを頭にもつてくる。この句の場合、それ

この句はふつう「閑さの中で岩にしみ入るような声で蟬が鳴いている」と解される。新編日本古典文学全集の『松尾芭蕉集②』は「紀行・日記編」「俳文編」「連句編」から成るが、このうち、『おくのほそ道』を含む「紀行・日記編」は井本農一、久富哲雄校注・訳。そこではこの句をこう訳す。

夕暮れの立石寺の全山は、物音一つせず静まりかえっている。そのむなしいうような静寂の中で、ただ蟬の鳴声だけが、一筋、岩にしみ透るように聞える。

この訳だと、句の「閑さや」を「閑さの中で」として訳したことになる。すなわち、「閑さや」の切字「や」の存在を無視したことになるのではなからうか。

なぜこう訳したか。考えてみると、まず地の文に「岩上の院々扉を閉て物の音きこえず」さらに「佳景寂寞として」とあるからだろう。この地の文を拠りどころとして「閑さ」を「夕暮れの立石寺の全山は、物音一つせず静まりかえっている」といいかえた。「そのむなしいうような静寂の中で」蟬が岩にしみ入るような声で鳴いている。

しかし、芭蕉が地の文に「岩上の院々扉を閉て物の音きこえず」と書いたからといって句の「閑さ」をこれと直結させ、この「閑さ」を「岩上の院々」の静寂とするのは短絡的すぎはしないだろうか。これでは芭蕉の名句が地の文の要約であり、繰り返しになってしまう。確認しておきたいのは、『伊勢物語』のような王朝の歌物語語にしても『おくのほそ道』のような江戸の紀行文にしても、まず歌があつて文があり、句があつて文がある。決して文があつて歌や句があるのではないということ。

が「閑さや」である。続けてそのきっかけとなったものを添える。それが「岩にしみ入蟬の声」だった。

尾形仿氏の『おくのほそ道評釈』（角川書店）はこう訳す。

何という静けさ。ふと気がつけば、この静寂の中で蟬の鳴き声のするの、あたかも四囲の苔むした岩石の中へと沁み透ってゆくかのような気がする。あたりの静寂はいっそう深く、自分の心も澄み切って、自然の生命の中へと融け込んでゆくかのようだ。

これも順序が逆ではなからうか。芭蕉は I にふと気づいたのでではなく、II にふと気づいたのである。

古池の句も「閑さや」の句と同じ順で言葉が並んでいる。芭蕉は蛙が水に飛びこむ音を聞いて心の中に古池を思い浮かべた。発生の順番はまず蛙が水に飛びこむ音がして、次に古池が心に浮かんだ。しかし、句の言葉の順はその逆である。

古池や蛙飛こむ水のおと 芭蕉

まず「古池や」と打ち出してから「蛙飛こむ水のおと」をおいた。だからといってこの句は「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」というのではない。やはり「蛙が水に飛びこむ音を聞いて古池の面影が心に浮かんだ」といっているのである。

「閑さや」の句を「閑さの中で岩にしみ入るような声で蟬が鳴いている」と解するのは古池の句を「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」と訳すのと同じだろう。

「閑さや」の句は言葉の順序だけでなく、発想自体が古池の句によく似通っている。芭蕉は立石寺の岩山の上で蟬の声を聞きながら広大な

天地の静寂に耳を澄ました。この句の「岩にしみ入蟬の声」は芭蕉のまわりで今しきりに鳴いている現実の蟬の声であるが、「閑さ」は芭蕉が心の耳を澄ませた天地の静寂である。

古池の句では蛙が飛びこんだ水の音が芭蕉の心に古池の面影を呼び覚ましたのであるが、この「閑さや」の句でも蟬の声という現実の音が心の世界を開いたことになるだろう。芭蕉は「蟬の声」という音をきっかけにして天地の「閑さ」に心の耳を傾けたのである。

(長谷川權『古池に蛙は飛びこんだか』中公文庫より)

※1 紀行：旅の出来事を記したもの。

※2 地の文：和歌・俳句や会話文以外の説明や描写の文。

※3 『伊勢物語』：王朝時代(平安時代)に作られた、歌を中心とした短い話を集めた物語。

問一 ――線1「まず歌が――文がある」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 作品の前半に重要な歌や句があり、後半の地の文でその背景などを説明している。

イ 歌や句が作品の中心で、それらが作られた事情や背景が地の文で述べられている。

ウ 重要なものはもっぱら歌や句であり、地の文の解釈は読む人にゆだねられている。

エ 地の文が書かれた後に、何度も推敲した歌や句が書き加えられている。

問二 ――線2「二つの切――している」とありますが、その説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 句の前の地の文に全山が静かだとあるため、それに続く句の出だしの「閑さ」を全山の静かさと受けとっている。

イ 切字「や」が示す内容に注目しようとせず、「閑さ」「岩」「蟬の声」といった名詞にばかり着目している。

ウ 地の文に描かれている実際の景物と句に描かれている空想の世界を、同一のものとして受け取っている。

エ 蟬の鳴き声がとぎれた時、本来そこにありながら気づかなかった静かさを感じることができたと解釈している。

オ 蟬の声を聞いたことと静かさを感じたことは別の内容であるのに、「静かな寺で蟬の声を聞いた」ととらえている。

問三 ――線3「芭蕉の句には忠実ではない」とありますが、それはどのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 『おくのほそ道』という作品の訳としては正しいが、句の内容を真に理解しているとは言い難いということ。

イ 句の内容を正しく解釈しようとするあまりに、句の説明である地の文をおろそかにしているということ。

ウ 芭蕉が確立した独自の作風をふまえず、一般的な句の解釈になってしまっているということ。

エ 芭蕉が切字を使うことによって表現したかった句の内容を、正確に表した訳になっていないということ。

問四

X

に入る言葉として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 針小棒大

イ 枝葉末節

ウ 大同小異

エ 多種多様

問五

I	II
---	----

に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア I 自然の閑さ II 自分

イ I 蟬の声 II 自分

ウ I 蟬の声 II 天地の静寂

エ I 自然の閑さ II 天地の静寂

問六 ――線4「発想自体――っている」とありますが、「閑さや岩にしみ入蟬の声」の句と「古池や蛙飛こむ水のおと」の句を比べて、筆者はどのような点が似通っていると言っていますか。わかりやすく説明しなさい。

問七 本文全体をふまえて、その内容に合っているものには1を、合っていないものには2を、それぞれ解答欄に書きなさい。

ア 『おくのほそ道』において、「古池や」の句と同様の発想で「閑さや」の句を完成させることができた。

イ 出来事の順番に対して句の言葉の順番を逆に表現したこと
で、芭蕉は宇宙の静寂に気づくことができた。

ウ 本来地の文は句の説明になってはならず、また句も地の文の要約になってはならない。
エ 芭蕉は一つの音に耳を奪われたことをきっかけに天地の静寂に気づいた感動を、切字という技巧を用いて表現した。
オ 蟬の声によって宇宙の静寂を知るには、自身をとり巻く世界を感じるだけでなく、それを句にする創造力が必要である。
カ 「閑さや」の句は蟬の数や種類が論議されてきたが、それらは重要な問題とはいえない。

【国語】

解答用紙（中学第一回）

受 験 番 号

氏 名

得 点

一
1
2
3
4
5

二
問 一
a
b
問 二
問 三

問 四
問 五
問 六
問 七

問 八
問 九

三
問 一
問 二
・
問 三
問 四
問 五

問 六

問 七
ア
イ
ウ
エ
オ
カ